

2.2

2.2.2

2.2.2.2

2.2.2.2.2

2.2.2.2.2

2.2.2.2.2

2.2.2.2.2

2.2.2.2.2

2.2.2.2.2

2.2.2.2.2

宇津集 - 春日詠

てはわかぬいづらの春を惜しむれば
染ぬらん花の八重の枝に

菟玖波集 - 春下

時しに降るる春の雨 佐保姫や
春のかへすを送るらん

藤原家隆

日産レンタカー・日産カーリース

梁塵秘抄卷第一

長歌十首 古柳卅四首 今様二百六十五首

春十三首	夏七首	秋十五首	冬九首	四季八首
二季八首	祝八首	月九首	戀十四首	思十二首
怨廿首	別四首	雜上七十六首 下六十二首		

一本巻末に本抄命名のよりどころについて
解説がある(三四五頁注)。
二「ながうた」古今十九雑体の部の長歌の前
に「短歌」と誤り記して以来、長歌を短歌と言
い短歌を長歌と言うことが行なわれ、藤原清輔
の奥義(抄)・藤原俊成の古来風体抄にもその
論が見える。ここに取められた今様歌謡が短歌
体のものであるところから、この呼び方が歌謡
名に用いられたのであろう。
三梁塵曲惣目録(蔵小路信俊に「小柳 故」
小柳此等皆号「雜歌」)。古は小に当たる仮名
今様歌謡中、最後我の今様で単に今様と呼
ばれるようになったもの。他のこれと類似の歌
謡と区別するために「只(只)の今様」「常の今
様」と呼ばれたりした。
五六四季・二季は、それぞれ一首中に四季・
二季を取り上げているものという意であらう。
七短歌体で初めに「そよ」のはやし詞をとる。
十首共後の新古今を含む勅撰集などに見える純
貴族趣味の歌。
八日本の芸能には祝言の歌に始まる伝統があ
り、当時の白拍子舞などもこれによった。一注
そよはやし詞。後拾遺七賀「三条院み
1 このみやと申しける時、帯刀(帯)の陣の歌
合によみ侍りける、大江嘉言(嘉言)の陣の
陣は春宮(春宮)坊侍衛の士のいる所。新撰朗詠
にも。井内侍日記に利用して詠う場面。曾我七
母の勘当有(有)さるる事に、五郎がこの祝歌を
詠い舞ったとする。○千世に一度ある塵の千
年に一度地におちつきとまる塵が積もり積もつ
て。一補。これを開卷第一にすえ「ある塵」に
秘抄の「梁塵」の意を寄せた祝言としたもの。

長歌十首

祝^八
1 そよ、君が代は千世に一度ある塵の白雲がゝる山となるまで
春
2 そよ、春立つといふばかりにやみ吉野の山もかすみて今朝は見ゆらん
3 そよ、我やどの梅の立ち枝や見えつらん思ひの外に君が來ませる
夏
4 そよ、我やどの池の藤波咲きにけり山ほととぎす何時か來啼かん
秋
5 そよ、秋來ぬと眼にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる
冬

2 拾遺集一春「平定ふんが家の歌合に詠み侍
りける、壬生忠岑(忠岑)」。六帖一・忠岑集・
拾遺抄・前十五番歌合・金玉などにも。九品和
歌に上品上。和漢、立春、第五句「けふはみゆら
む」。○いふばかりにや。いふだけか。
3 拾遺集一春「冷泉院の御屏風のあに梅の
花ある家にまらうどきたる所、平兼盛(兼盛)
(二)」。拾遺抄は同。新撰朗詠・三十六人撰な
どにも。○我やど。わがや。
4 古今三夏三言、左注に「ある人のいはく、人
まろが也。柿本集などにも。一補。○池の
藤波一池のはとり(中島であらう)の藤の花。波
は池の縁語。○何時か來啼かんいつ来てなく
だるうか。待つ氣持を表わす。新撰和歌二・六
帖六(八)第五句「いまや來なむ」。
5 古今四秋上、藤原敏行一、新撰和歌一・六
帖一・和漢、立秋・敏行朝臣集・三十六人
撰にも。新撰万葉下、第五句「被驚計留(被驚計留)」。
○さやかに。はつきりとは。○れ。自発。
6 信明(信明)集「御屏風の絵に紅葉散りたる
を見る人々」。新古今六冬、源信明(源信明)和
漢、風にも。○月かげに。月の光の中に。
7 後撰八冬、題知らず、詠み人知らず、四
帖一・降たり降らなかつたり。○降りみ降ら
ずみ。降たり降らなかつたり。
8 古今十九誹諧歌、伊勢(伊勢)三、初句「なには
なる(六)帖三・伊勢集・三十六人撰などこ
れを踏襲」とあるが、この八の歌詞は初句も金玉
に一致、同集によつたものであろう。○津の
国一撰津の国。○長柄の橋一淀川の支流長柄川
にかけたもの。老い朽ちて老いたとくに用い
られていた長柄の橋さへも。一補。○尽くるな
り。聞くところによると流失し去つたというこ
とである。元永本など「つくるめり」。

9 袖中抄十に「又古歌に云」として掲げ解説。
○麗の清水—京都市左京区大原町、寂光院
東南の泉。補。○すまば—「澄まば」に「住
まば」をかける。○面変はり—顔つきのかわる
こと。

10 古今八離別、貫之、四四。拾遺集十九雜恋
「しがの山こえて女山の井に手あらひ
むすびてのむをみて、貫之(三三六)。貫之集十
(詞書、拾遺集とは同)・新撰和歌三・六拾二
にも。第三句までは「飽かて」を導く序。▽す
くい上げる手から落ちるしたりに浅い水底が
じき濁ってしまつて、なかなか満足すること
ができないを序に、満足するところまでも行か
ず心残りのまま別れてしまふことを嘆く意。補。
一原本の面影を伝えるために左の一首までは
そのままに写した。曲名「古柳」も、古柳
の代表的歌詞口伝集十 四六二頁の二の歌詞
によるか。補。

11 はやし詞を省くと「小柳に、下がり藤の花
咲き匂あけれ、睦れ戯れ、うち靡き、青柳
の、いとそめでたき。補。○いとそめでた
き—実にいいな。」「いと」に、柳の「糸」を
かけた。

二 梁塵曲惣目録以下、員数の増加を伝える。
補。

三 目録より一首増。今様の抄出十首中、第一
は春の首歌、第二は同じく春中のものを第三と
の間に後から補つて記入したもの、第三以下の
四首は雑からの抄出。後の四首は秘抄二、法
文歌から抄出したものか。

12 新年春來れば—新年で一度切れる。○門に
松こそ立てりけれ—「立てり」は状態
「けり」は詠嘆。補。○長からん—「長くある
らむ」の約。「ぞ」の係りをうける連体形結び。

13 押小路本、歌頭に○印。歌枕の物尽くし。
○歌枕—伝統的に取り立てて和歌に詠み入
れ用いられた語句。補。○佐保姫—奈良山の
東、佐保山の女神で、春を織りなす女神。西
竜田山の女神竜田姫の秋を織りなすのに対する。
○翁草—白頭翁とも書く。白毛でおおわれ、春
先暗赤紫色の六弁花が咲く。花後花柱が成長し
て白毛が銀髪をなびかせる趣がある。

14 物は尽くし。次の「歌人は尽くし」に相對
する。二六・四三の類。○聞くに—集は—そ
れを聞くと、面白い、いいなと思われ和歌の
取められている集は。○後撰古今拾遺抄—勅
撰集・私撰集・特殊の集・歌合を和歌集として
並び列した。和漢は、単に朗詠集とも称
せられた(江二談抄)。ここでは漢詩文の句に
配してある和歌を對象として。集の選択を
通じて藤原公任(公任)を權威とする当時の意見が
表わされている。補。

15 歌人は尽くしで、前歌の「歌集は尽くし」
に相對する。補。○めでたきは—賞賛す
べき人は。もてはやしたい人は。○人丸—万葉
歌人柿本人麿。古今「人まろ」人丸、拾遺集
以下にも「柿本人丸」。○遍昭—遍照とも書く。
俗名良岑宗貞(宗貞)。左近衛少將・藏人頭にも
なつたが、仁明天皇の崩御にあい出家。山
僧正。小野小町と共に古今序の六歌仙に数えら
れ、小町との贈答歌は後撰にも出、大和物語の
彼の悲痛な出家を説話化した物語にも見られる。
○道命—藤原道綱の子。比叡に登り慈惠(慈惠)
大師良源の弟子となり、法華経講誦の声のためた
さは今昔などに見える。赤染衛門との贈答歌も
あるが、宇治拾遺・古事談・著聞集などに和泉
式部とのロマンスを伝える。道命阿闍梨(阿闍梨)集
がある。

6 そよ、ほの／＼と有明の月の月かげに紅葉吹おろす山風の風
7 そよ、神無月降りみ降らずみ定めなき時雨ぞ冬のはじめなりける
8 そよ、津の國の長柄の橋も盡くるなり今は我身を何に譬へん
9 そよ、大原や麗の清水世にすまば又も逢ひ見ん面變はりすな
10 そよ、掬ふ手の雪に濁る山の井の飽かでも人に別れぬるかな

雜

古柳卅四首
(こやなぎ)

春 五首

11 そよや、小柳によな、下がり藤の花やな、咲き匂あけれ、ありな、睦れ
戯れ、や、うち靡きよな、青柳のや、や、いとそめでたきや、なに
な、そよな

是以下略之

今様二百六十五首

春 十四首

12 ○新年春來れば、門に松こそ立てりけれ、松は祝ひのものなれば、君
が命ぞ長からん
13 春の初の歌枕、霞たなびく吉野山、鶯佐保姫翁草、花を見すて
歸る雁
14 ○聞くにをかしき和歌の集は、後撰古今拾遺抄、新撰金玉朗詠集、六
帖前後の十五番
15 ○和歌にすぐれてめでたきは、人丸赤人小野の小町、躬恆貫之壬生の
忠岑、遍昭道命和泉式部

16 物の名から想像・連想せられる内容とその物の性質との食いちがいを対比する見立てを含んだ言語的な機智を、対照・構成の技巧で聞かせるもの。○早—今様歌謡の一つ「早歌」の意、早歌としても語られること又は早歌の部にも出ていることを示すのであろう。三にも法文歌にもある。「はやうた」(日伝集十 四五六頁)。神楽の早歌とは異なるが、やはり謡い運びが比較的速いからの名称。○消えせぬ—「消えぬことをせぬ」の意の連体詞。消えぬことがない。消えない。「尽きせぬ(な)り」などの類。○雪の島—老岐(さ)の島にかけた。○補。雪の島といえはいつか消えてなくなることありそうなのに、というしやれ。○蟹こそ—「点せ」は、「こそ」を結ぶ「点す」の已然形。○補。○巫鳥—記・紀・和名抄など「し」と。すずめ科の小鳥の名。ひどくぬれるさまにいう詠詞「し」とをかけた。共にのち「し」と濁る。○補。○一声なれど—ただ一声しか鳴かなくても、というしやれ。○補。早—云注。○博打—「ばくち」の約。財物をかけ双六のさいをふって勝負をあらそう者。○雲。○平骰子—平さい。鉄さいはさいの名。四三さいは、二つのさいをふって四の目と三の目が出ること。○補。○文三—文三大夫定成、刑部別当佐頼、乃は薄小先生の「はく」の誤写か。○補。打ち得た者として高名の博打を列挙したもの。「とか」とかや」は法文歌・四句ノ神歌にも多く見られる。

17 法文歌二首と同歌、第二句末「遙かなり」。

18 慧光歌らすと無量と見える釈迦の入滅を月が隠れてしまったさまにたとえ、慈氏の朝日に対してしめる。○補。○慈氏—今「じし」。弥勒(みろく)の訳。今は兜率(たうそつ)天の内院にあるが、

16 常に消えせぬ雪の島、螢こそ消えせぬ火は點せ、巫鳥といへど濡れぬ鳥かな、一聲なれど千鳥とか

17 博打の好むもの、平骰子鐵骰子四三骰子、それをば誰れ□打ち得たる、文三刑三月、清次とか

18 釋迦の月は隠れにき、慈氏の朝日は未だ遙か、その程長夜の闇きをば、法花經のみこそ照らいたまへ

19 佛は様々に在せども、實は一佛なりとかや、藥師も彌陀も釋迦彌勒も、さながら大日とこそ聞け

20 釋迦牟尼佛は薩埵王子、彌勒文殊は十二の子、淨飯王は最初の王、摩耶は昔の夫人なり

21 釋迦の正覺成ることは、この度初めと思ひしに、五百塵點劫よりも、彼方に佛に成りたまふ

当来(きた)彌勒(みろく)として出世する。(その時は經によつて多少異なるが)釈尊入滅後五十六億七千万年を経てこの土に出て衆生を導く。○補。○程—間。○長夜—凡夫が生死(しじ)に流転して無明(みよ)のねむりのさめない間をいうが、この歌では現在を直接われわれ衆生を導く仏のましまさぬ時代とする意をこめる。○法花經のみこそ—法華經の功德、經力(きりき)を衆生を照らす大光明として光源にたとえていう。「照らし」は「照らし」の音便。「こそ」をうけて已然形に結ぶ。○補。

梁塵秘抄と名づくる事。虞公韓娥といひけり。聲よく妙にして、他人の聲及ばざりけり。聴く者賞で感じて涙おさへぬばかり也。謠ひける聲の響きに、梁の塵起ちて三日居ざりければ、梁の塵の秘抄とはいふなるべしと云々。

19 法文歌三首と同歌。○一仏・藥師・彌陀—大日如來の現われ。

20 法文歌三首と同歌。最勝王經捨身品などによつて釈迦中心に前生の因縁説話をうたった。○薩埵王子—補。○十二—「一二」の訛誤。法文歌三首と同歌、第四句「一仏と見えたまふ」。經、如來壽量品による。○五百塵點劫—はかり知れない久遠(きうえん)のたとえ。○補。一劉向(りうきやう)別錄に「魯(ろ)人虞公、声を発すること清越、蓋(さ)し梁塵を動かす」、列子、湯問篇に「昔韓娥あり、東、齊にゆく、糧にともし、雍門を過ぎ、歌をひさきて食を飯り、既にして絶えず」とあり、杜氏通典(と)に、梁五にはこれをまづめてあげる。懷風藻の詩「歌声落(らく)梁塵」。「歌聲動(どう)梁塵」、土佐日記、出発の条「船屋形の塵もちり」など。すぐれた歌声の形容。

二本「物」。三感涙を自ら抑えることができない。四落ちつかない。五すぐれた歌謡の意で命名に用いてある。六「という」の意。抄出者の文章か、抄出する原本にあった文章に抄出者が「と云々」を加えたものか、であらう。